



明利
2859
202

醒世山人著



山
東
滑
稽
言
文
選
全

東都書林 馬漢樓藏

へ13
2859



序

近來世に行はぬ。經典餘師
よ。上子奴ゆま。其美味
み。盲目の杖圖夜の提燈
愚図ふハ兵衛とも明くし。玉手

明治三十九年一月 日
小村俊三氏寄贈

の八町をも照しく。徳々入れ
大門はよもやらう。むろれちや
籃輿。此うまくの者へ
以。難然乾坤をく。癡呆組の
使徒も。馴染のみをど難
う。妄作やどい年子不觸固

や小人もく大道を学ハ鱧を
割。鯨の刀哉用が如く。是等うい
難うん。彼等をいさうる危丁
録作者の相應と。筆をの
操てまよあがも。己は軒紙を編
る。丈夫大樂通用とハ申ど。

も、永樂通寶の貨よりあつべ。
豊後申と号しども。兼好
法師の頼よりあつぬ。裁作
の四書より怒れあり。顔見ら
はもつらうしりきど。顔中と
見せし顔色。妄言う導すく

木曾海道近所の拵も
至は所より芝蘭の字。鯉の
店よりかんげ。一度嗅ぐべ
實より入る。鹿々邑の歌女等
が鼻より毛より。糠根を
そつちめやア道ハね云雨

山東市隱

京傳自序



皆

寛政二年庚戌孟陬

大樂

意氣狂句

堅衆曰大樂功者之虛言而
 兎角入欲門也於隙可見通
 人為樂氣質者獨賴金銀之
 損而貧乏次之客者必由是
 而迷焉則庶乎氣差矣
 それ大樂れうへといを喜はふ川の

汝千しんひふあそびて身代しんがひのひさことある
も思おもひのきざ恋こひの測はかりの深ふかきふをまじり
くまんと手てくざとりふ魚あまぎよ魚うまのあしき
となつくちどめををどろけともとそ
まじりたり或あるは上世うへよに夜山よるやま飛鳥あすりの山の
花はなえよ帯おび用もち巻まき者ものを引連ひきつれては法しよ行ぎやう
むねれ積つみよりもやううむしやう小教ちやう一
る紙かみ花はなの下したを念ねんひ武家ぶけが方の血ち

氣盛きせきあるハ妻つまをよんうごきさるぐ免めんハ
よい里さと中ちゆううらんふんぎのぶん積つみのりぬ
樂たのしみと出でけ一日いちにち金かね一分いちぶの借馬かかまよ鞍くら
うりて幸さい騎きの游山ゆせんもくしよハ忽たちまちん
の駒こま乃な手てづかゆるもて大内おおいにはは
かく申まうれ町まちの敷しき揚たかハ寛かん係けいの昔むかしより
いねと人ひとあやぐかろざる突つ出で一
の君きみが名なびうたの意い路ろ傍はた改かへの山やまを

なり振もひあんおへうえりて
生と花よえらるる花のさしこそ
うー目に喜紫山時多初堅急ら
不く此声よえどめそんづきめう
夏が来さそよみ今日ハいつうごと
来んよすくハ居續子采ぬけのあこ
客人とえゆるそ居續のるせはうを
わへくーとのつまのハニむん著とう

がむうひふ来てあうづーくたやう
かおんていざざりませなんざふと
のよこらハ圍う雲よてをきや
がとまん子まぐりをとらむと
マア一ツ吞がよしいエく友松を采
ぜんていさざりませぬとハいつくと
あさどハまきたるる山原ハ吉原
一ツのニツのこいつハあが人を

のんで名なのるるハハママまま此こゝ川がはへ流ながし
てままままひひ糸いと遠とほくくああままををががれれて
ともとも小こ碇いかりををおおりり一一木き乃の伊いららが
蜜みつ人ひとよよかかつつてて遊あそぶぶももあありり夏なつハハ雪ゆき水みづ
子こ遊あそ舟ぶねととううくくららにに産うむむ藝げい者しやののひひつつと
ぬぬききをを洗せんくくししととみみどどんんををひひととりりに
神かみ八はち人にんはは人にん救すく舟ふねををれれををととをを涼すずくくぬ
ととははままととむむととばばうう三さん強じやう也やととううで

ひひききくくくくのの大おほききいいせせんんよようう
隣りん子しははみみををススてて居ゐるる隠ひん者しやとと思おもふふ
ししここがが鳴な呼よ忍しのぶぶるるううをを花はな飛とびび蝶てつ
ををどどろろけけどどもも人ひと不し知ちとと侍さむのの意いハハ
ううここもも塵ちん若じやく必かな衰すいのの及およびび理りをを志しすす
ぬぬききををぐぐととやや千せん仞にんのの要あ身しんををううののそ
ききくく女にのの身み皮ひ袋ふくろとと云いふふ子こ糸いとががつつ
ぬぬ俗ぞく物ぶつととややののああののややううよよささりりぐぐも

こゝろ奥^{ウラ}の戯^{ウタ}れどやけんおん^{オン}夫^{ウサ}
でハあるをと憂^{ウレ}世^セを悟^{ウチ}知^チるも実^{ウチ}人^{ヒト}
ハ積^{ツキ}り一^{ヒト}組^{グミ}のまけを〜と金^{カネ}持^{モチ}ま^マ
そん^{ソノ}なめりつ〜と思^{オモ}ひハあ〜おま^{オマ}
感^{カン}るも根^ネが巴^{ウツ}か心^{ココロ}の欲^{ヨク}る不^フ志^シ
〜がりぞ志^シを汲^ヒぬゆ〜の迷^{マヨ}懐^{マヨ}ぞ
〜ハ隠^{カクレ}者^{モノ}も残^{ノコ}があ〜ハ生^{ナマ}者^{モノ}必^{カナラ}滅^{メツ}
の場^バあ〜も〜くま〜陸^ツ〜舟^{フネ}

を深^{フカ}まるも園^{エン}鏡^{カミ}縁^{ヅミ}の謂^{イハ}から〜
む〜ハ口^{クチ}も〜れぬをやあ^アのこ〜と
い〜がけあ^アハ口^{クチ}も〜れぬあ^ア〜
あ〜りて春^{ハル}る辰^{ツキ}さんと神^{カミ}政^{マサ}の
何^{ナニ}某^ガ水^{ミヅ}室^{シム}子^コ下^カ新^ニ〜と隅^{スミ}田^タ境^{サカイ}の
下^カあ〜とよせ中^{ナカ}田^タ屋^ヤうむ〜や
〜ハ舟^{フネ}をり〜とのが〜を
濤^タの玉^{タマ}屋^ヤとり〜と〜と涼^{スズシ}とい〜を

これも酒色のニツ子而已とをまある
かり文月ハ廊の燈籠子町を
照しゆの總角子持があつるとも
おろく園夜とあつん景色なり
新毎よとのつらぬるてうらんハ
客人のあつりあくれ出し金玉
うとらうごうひ唯人の氣をつりあ
ぐるせんまい志うけよハ美客の月

をかどらうせさうらに肉し中うれう
くらと思らさず縮張の燈籠ハま
いてるゆれと女帝の薄情なる物
のうらハまうも又くす二のうハ里
の硝子細工ハ名君をさうさよつる
しつらうと思らるこそよもそのおこり
ハ正徳の昔中万字屋の玉葉が
追善のくち子とがうちうち

るれば今ハそとよひさうくく旅人を
迷ハるに悩のあうさちとふたさきり
を来解合の向子さち心をひるあり
去るののほうとく燈籠のさうくさ
とまことむむるり十又夜乃月
足子ハさきも賤しとも今宵の月
をめで詩を作哥を詠ト愛白を
梅也又は夜色里のあざりひをいとよ

さうらなりけ日深川八幡の糸れあそ
土橋仲町三櫓新古の石場子のりる
まで一年の大紋日月と糸れと
を兼儀しとる遊び子日より川と
茅も一夜よりあがしつけの不
せとまりりとの百姓とまり店老あそ
バ百日の説法も尻一ツ子放て院を
ひくくお寺橋ありことをま如の

月ツキ子コああつつせせつつのの月ツキはは隠かく居まのの月ツキははと
ああらられれここりり縁えん行ぎょうのの月ツキもも一いっ風ふう流りゅう
とと南なん驛えきのの徳とく徳とくままううららここみみ五ご松しょう
板いた村むら田た新しん叶えつ已いががささゆゆくく物もの云い乃の
元げん位い子しかかりり髪かみののちちけけのの房ぼううう安あん
房ぼう上じやう総そうのの月ツキはは真まことトト田た毎まいありあり子こ
をを考かんがへへてて吳いんんすするる伯とく母を捨すて山やまああ
出いがが月ひ業ぎやうををささららししををままりりもも次ま次ま次ま

ぬぬ敷しきししそそららままハハ撮ととと元げんハハむむ吉きち寺じやう
小せう高こう嶺りやうののままりりりりぬぬらら残ざん令れい散さん
てて遊あそぶぶももあありりそそ外ほか摺すりくくののいいさ
ささららるる色いろ里りままをを月ツキのの光ひかりりりまま
けけりりかかくくてて走はしおお窓まどのの月ツキハハるるるる
そそららしし喜よろこ橋はしのの月ツキハハ今いまささららりりもも
忍しのぶぶかかりり亦また海うみ安あん寺じやう正せい燈とう寺じやうれれ紅こう葉えつ
忍しのぶぶハハ今いまささららりりもも今いまままでであありりつつ

息子とりく 化粧のふえりうい
てちてハ鬼任里まらけてままひ舟
楓の綿より正木の如圍の綿ふ
らるまあや 楽又りまらるるすかハ
雪えとそ家根舟子居火燵うら
小あしぬまんのゆ晋の謝安ままけ
ぬれを別深の故を携雪ふまら
ぶ所までとりよめよくかむいし

いぬが詩よりむらみ 誇めくら 浮舟
の心意気もえやなり 春秋の
角力三つの戯 掃杉田の梅え江の
清の月え玉川の鮎持末間の死系
え今頃の雪え巴季おくれ 楽ハ
かぞええ 羅一 是天地と云 細
工人の犬かきり子しそめし
はるるそとありあれども 月電花

の三ツよとむむとりのひるがうつまるる
ハ女色りよの楽をハき一月の清き
とて女帝の胸の鏡子あつて雪の
美白りりとして抱て麻とたれも
あ、花ののりをねバむるがく
とつて口舌もあつてそきよりのも
眉ハ月をまろ肌ハ雪をあざ
打き姿ハ花をまらさせ返りしま

屯嵐子ちね笑人をスそ
むろどやゆを外子あそのあんや
花より壺子色糸より吟気とを
糺儀年不生れと人の言るべ
こそこそ量の味ひある女色の極意
らぬ故ぞりりと流人皆是子日
むみて今時の楽をスるふはまる
和も子女色こそけるなり昔も人情

みうはるるゆりくま子衛ゑいの君きみが女子おんなの
ろきをまじりしれりまご徳とくをこのむ
のの色いろをあのむか如ごとくまるののよ
むと曰いなり鬼おに角かく捨すてぐさたはけ
たの迷まよひとまらうまらうりおまごも
富とみ乞がのころらありて驚おどるこの
あうくても難かたし花はながうりういとそ
飛か鳥せり山やま子こ飛ひ續つもりうす月つきの明あまり

とそ川ひ裳まうくつてハ真まもり裸はだか
で雪ゆきも面白おもしろううずさきさバのいふ
女おんな色いろ子ことむむらとハひらうがうつま
ろ和わ合あまり金かねさく沃よく山やまるれを
忍しのびらうも奇あ才さいと思おもひをわしき
も貴たかく鶴つるよのり糶ひ子こ糸いとし孰あ
うう弱よをよ出いし石いしをうりて羊ひつぱとふ
毛け仙せん術じゆつありもえらりうささ成なるべ

松牙ハ天一の御里にツ子加守ハ申を
とむとこそ今令侍の物カひと志ら
まじり志らば令守くしてハ楽ハ
かぢぬりと男と女とてたあ
らず親深ハ誓をまけて松と
楽こそまじらにありと大平末をのぐ
がそと男を楽ハ又令守あもあふべ
唯なるべしそ心のたのしみと

一の世の老の俗おまハ海軍
さきバ楽ハハ子息もあふ知あり
骨牌子らとせ目もあれば海軍あり
さぬ夜いとてもあしこそまじり好
ゆへのまじり又女と心仲志
てあまらふのちまじりもあまのころ
とらぬのあふり又海軍賞て新
植の菱椒えるがう女房とてし

一登のんで啼呼てんとさあしぬ
天徳寺ひさうづりて寐てのつるも
ふの〜と男へを来とせう〜令持
とそもあその極ををさ〜ねを
元封を教むる〜あは来とをり
めて多く〜ふ至るありさ
とバ大楽の樂の字よをあき候
あ〜バあ年よりあるべう〜代若世の

孫乞食と一人の来より孝と
慈との二ツをう〜あふのあ〜めの
言ありこれむべな〜すや候日ま
で日な一の涼の場ふとめてをや
さんせ〜集集ある地も今日
ハ忽一河の流と愛むこれ清水
ありぬ盛衰の世の中を天の然

志^しの^のあ^あり^りの^のあ^あら^らん^んは^はそ^その^の志^しや^やナ^ナア
と^と歎^{たん}息^{そく}を^をま^まる^るも^もを^をの^のま^まじ^じが^がと^とい^いこ^こみ
の^のあ^あら^らし^しう

大^{たい}樂^{らく}畢^{とんぬ}

通^{つう}用^{よう}

若^{ごと}衆^{しゆ}曰^い無^む錢^{せん}之^の謂^を通^{つう}不^ふ迫^{ぱく}之^を
謂^を用^{よう}通^{つう}者^は半^{はん}化^か之^の貧^{ひん}乏^{ぼう}用^{よう}者^は
紋^{もん}日^に之^の出^で入^い其^{その}錢^{せん}乃^{すなは}寬^{かん}永^{えい}年^{ねん}
中^{ちゆう}通^{つう}寶^{ぼう}大^{だい}夫^{ふう}恐^{おそ}其^{その}久^く而^{して}絶^{とつ}也^{なり}
故^{ゆゑ}筆^{ふで}之^の於^に丈^{ちゆう}以^{もつ}授^{さづ}格^{かく}子^こ其^{その}子^こ
霄^{せう}言^{げん}無^む理^り中^{ちゆう}亂^{らん}寢^{しん}客^{かく}衆^{しゆう}不^ふ逢^{ほう}

意^い氣^き狂^{きやう}句^く

其夜爲千里語之則渡苦界
省連則恨藏於店 下畧

そき通とハるんぞ列子りのりるとあり
徳をこく人まりりり之を智全と信と
財をひく人まりりり之を通人と信と
とは言こうつけてるままバよく今
の通と一中りむる者まあれり然ら
ままも金銀ハのろまあをやつでもはくは

山ま子おちて居るかりりり質ハあく難え
唯通と神まとの見列を知るをし
以て通と信ひ通と神まとの見列を知るをし
をあくさると神まとの見列を知るをし
子通用の二字を以てのりりりりりり
とんとして風練せんまる里を井
とのりり井を十あいせて通とのりりりり
りりて考まハ子万里の外まで

もよくせうらまると通とひべー
又書の首未金を通とひあれば
初會の首よりとられてのく未まで
も金くしそりきうこのころにりな
きを通とひべーめ来子三妙六通あ
里井は圓通あり条の仙人も通を
うーる入てハ下界とつけと突と物
も通かうせてハ鞠町の市ふさうさ

る者系通深川通芝居通とひも
よくそり及とゆらるをひへー又用
の字とひもん天地金切あり万物
金判あり又人々用ありと人用
ら々時ハ下サもくらまらぬ新造松
とあをづれ用られさる時ハ麒麟も
魯人の古傘子包まは牡丹紅葉の
起とるもん又傾博の言子金銀を

やくそく一級日物日をこのむむれ
 と惣て用とりり又急用する
 ちくる文は用のありきたりなり
 酒やの四用御用の外車五これ等
 まへのものも況り又通氣とづく
 時ハ質物の通目物のるりりこれ小
 ついて昨日一ツの身候ありなま表徳
 を為るとりり老ありそ身代ハ飯器

は車をきりけりりあのみりりな
 是バ何りりりり一臺ハ傾城買
 は身をむぎねて花ふり月
 うしれ面おも志のび花ももみひ
 造方の鼻ひくうねが花の鴨居を
 ちりりとてぞえ旦の庭のうら火よ
 里大二十日の拾賣あるはまを月
 雪茶のこつ蒲團の上よ花一

て他^たを^わる^んる^りし^しも^もその^{その}と^とま^まる^るる^る母^と
と^とあり^りて^て而^而后^後世^世は^は隠^隠差^差さ^さて^て養^養
痛^この^の刺^さ業^ぎは^はひ^ひさ^さこ^こみ^み孤^こ獨^{どく}の^のら^らじ
も^も世^よと^とあ^あら^らふ^ふま^まね^ねる^る細^こる^るる^るべ^べし
され^され^れば^ば昔^{むかし}と^とり^りく^くる^る梓^{すし}屋^や流^{りゅう}の^の三^{さん}味^み
線^{せん}も^も心^{こころ}の^の根^ねメ^メと^とけ^け且^{かつ}び^びら^らハ^ハま^まの
洞^{どう}子^しあ^あら^らう^うれ^れを^を憂^{うれ}世^よを^を恐^{おそ}ぢ^ぢテ^テヨ^ヨロ^ロの
幸^{さい}は^は結^{むす}び^びを^を都^{みやこ}も^も心^{こころ}安^{やす}ら^られ^れば^ばひと

し^し不^ふ任^{じん}者^{しや}屋^やの^の煙^{えん}管^{ぱん}は^は心^{こころ}の^のや^やみ^みを^を
通^{とほ}し^し小^こ人^{にん}閑^{かん}居^いし^して^て不^ふ若^{じやく}と^とあ^あせ
の^のり^りま^まし^しめ^めを^を老^{らう}ま^まこ^こら^らま^まれ^れね^ねば^ばえ
し^しや^やく^くも^も斤^{しん}肌^きと^とり^りれ^れて^て脈^ま下^かま^まを^を
ち^ちつ^つき^き腕^{うで}の^のり^りれ^れが^がく^くろ^ろも^も外^と山^{やま}の^の
麓^{ふもと}は^はひ^ひら^らく^くく^くざ^ざん^んぐ^ぐは^はま^まま^まく^くて^てま^まく
ぢ^ぢり^り額^{ひたい}め^めを^をあ^あげ^げし^しも^もら^らり^りし^しう^う角^{かく}と
ま^まて^てい^いさ^さら^らふ^ふ眠^ねる^る子^こ抱^{かか}を^をお^おど^どら^らう^うと

ハ誰そ時宗ときむねはあ〜ねバ祐すけ我われの幽ゆう冥めい
まもあるま〜く時とき〜ねバ池いけの水みづ霧きり
とも思おもわれず羨あやうらうらと首くびを
あられバ〜もわ〜りふ果み然しか然しか
形かたちの怪あや物ものあ〜りれ出で〜り風かぜと
お〜教おしうごきてを〜りしき
〜と〜ん〜き〜く濃の乳にの息いきさ〜
鼻はなと〜ぬ〜島しまの一月いちげつ〜るより

きも魂たまも天あまと〜飛とで〜〜に人ひと心こころ
地ちは〜り〜るが彼あ化ま物もののうら
改かと思おも〜れが〜げ〜る夢ゆめ
て中なかり〜のい〜ふ馬うまの〜り〜す懼おそ
る〜こ〜れ我われ〜ハ夢ゆめの昔むかしあ
海うみは〜ら〜び〜る平ひら家けの〜門かどもあ
ら世よ化ま物もの屋や敷しきの煤すす拂はら〜もた〜
質しち物ものの精せいり世よの中なかの〜りけ〜も

の爲ためははづらら 教しよされてて 繩ひ目めの 恥はぢ
ううけけ七しちツつ屋やの 義ぎ子こあありりししをを
浮うききもも中ちゆうへへ流りゆうももああくくむむ迷まひひ居ゐ
ろろととちちややハはツつ月げつははよよののべべりり丈せん首しゆよよ
をを質しちとと云いおおひひるるききふふああららずず殺ころすす
よよ人ひと質しちあありり信しん疑ぎはは言ことば質しちあありり借か
金かねをを質しちままををくくととふふ女によ房ぼうがが自じ援えんをを
切きるる時ときのの捨すて言ことば糸いとふふししをを清きよ水みづのの孫まご

差さとと門かど向むかひひの 備ひりりむむじじりりききるる 何なに
某がのの人ひとととやや十じゆ念ねんをを質しちままををきき
ころころあありりししがが質しちまま十じゆ念ねんののううらら
一いつ念ねんををののどどささぶぶ極ごくままけけとと人ひと生なま居ゐ
九く念ねんののととああららししききるるよよりりてて九く念ねん
寺てらとと云いトと寺てら号ごう何なに方かたよようう今いまままののここりり
ころころああららししをを質しちままああららししババ佛ぶつのの方かた便べん
ととももああららしし又またああららししとと云いトと字じをを質しちままををきき

る連分^{ついで}所^{ところ}もあれが風流^{ふうりゅう}の友^{とも}もな
まら吉人^{きちじん}納子^{なうし}ハ巴^{あま}グ名^なを貸^かまよと
ころ呼^よあり彩^{いろ}田^た義^ぎ貞^{しん}ハこがねづ
の者^{もの}刀^{やいば}をお川^{がわ}源^{げん}会^{かい}稻^{いな}村^{むら}か誇^{たか}の海^{うみ}
中^{なか}へ貸^かまよとがりて軍^{いさぎ}の利^り運^{えん}を助^{すけ}
神^{かみ}はくどくまこしるあり新^{あらた}神^{かみ}を
を感^{かん}念^{ねん}しそ彼^あ方^{なた}刀^{やいば}海^{うみ}とよ浮^う流^{りゅう}
しとうやられ貸^かまよ流^{りゅう}そと云^い言^{げん}

ありハハ財^{さい}財^{さい}のりるあり今^{いま}
よまら^{まら}を貸^か利^りが演^{えん}とりも財^{さい}所^{ところ}
留^{とど}るるぞりー又^{また}貸^かまよとり言^いまは
てハ款^{くわん}の上^{うへ}借^か款^{くわん}の下^{した}貸^かあり或^{ある}ハ慈^じ
と丁^{ちやう}の入^{いれ}入^{いれ}おあり天^{てん}地^ちも又^{また}貸^か面^{めん}の
度^どをのりも屋^や主^{しゅ}受^う人^{じん}のりも貸^か物^{ぶつ}
をらるるむ火^ひも盗^{たう}人^{じん}ハ支^し損^{そん}鼠^{ねず}会^{かい}
ひハ屋^や主^{しゅ}の損^{そん}と控^か札^{せつ}よと云^い言^{げん}

あるは武の倣は曲るといふ言あり是
十の字の尻をまぐれば七の字と
る是よりをとりしとつける
よし七の尻と晒落るも別はゆん
なりそれもさしおんよあるは
唯ゆびをまげてさすればさ
らるなりあやまざらんま
あらずやあまもありとて

質店を原子舗といひ質物を興
質といひ質れを商賣するぞと云俗
質あり固執くハ持まの身がわりは
さうて憂うんるんをさへ火差の
難儀とまらふりのあつに今ハ
字は身をのらるるやともされ
我等をくらしむるぞうし武
女帝を身受せんあは

とても我われくつうらうをうす利り
あげをささげんよまがもるれハ
は牙はハ嵐はよらひさうんれつつのの骨はハ柳は
系けいの干かん店てんはさうらうさまは恨はとをう
さんさん子しハ貧びん乏ぼう之ぎ神しんの未ま社しゃとがうと彼か
悲ひ不ふ知ちの徒たか皮ひ肉にく子しはけつりりを
是これ等らとくうーめんめん海かいハままいもあま
きもせうらちの舟ふねたたればはるとを

かたさうせ世よの中ちゆうの不ふ持ち者ものとも
子こ傳でんてゆらひらけりりとさんあて
のの有あきき圖ず雲うん貨かをを屋や敷し中ちゆうふ心しん
ゆきせんせんと僕わ屋や地ち獄ごくの若わ改かい大だい王おう
小せう志しををしれれゆらぬををここひひこれこれまで
あうりりと出でるるををややとヒウヒウドロドロくの
かさざまりかきけままとくく小せうあ
あしして南なん風ふうはああし海かい月げつののぶぶく

ふちりくとうせりる鳥有も姑乃
不どんおそろーりーか僕拙れ
出冥子おこひーる吉今子奇る
あまを彼等が迷懐るく西
白く増をお不えーと予おかり
ーが彼僕拙の鞋がひーくもー
金銀の急用ありて僕を雇とも
うけるむがけりきハ悲をうけて

ひどき工面をまぬれー悲を去ら
ぬ子あくるべー其時ハ必僕の然と
まつきて己くが身とらうぐとと
うさぐひりー金銭ひうさう流
衣を潔よ肩子うとと裾子ハの
僕よ雇ても流さハせまいと流
八月がそそバ流るるり利よの
らせんよりのもつまる不ハ僕あり

いろはに類方の名の字の一字は笑
墨子か上子と女房をいま
しやしも不宣乎

通用畢

豊後

樂酒亭主

意氣席中

此長幕茶番而時語之不肌柳

橋乎有隙日待夜來

未茶飯食乎

人不聞而不喜不亦素人

平

去佐上下外記袴半右羽織子及方股

川豊^{ひきぶ}浮^うりあ^あひや丸^{まる}裸^{はだか}と^とり^りひ^ひー
ハ^は平^へ等^らが^が生^うれ^まぬ^まあ^あの^のる^るま^まて^て今^{いま}ハ
古^と依^よ前^{まへ}も^も出^でー^がさ^さう^うに^にか^か記^きハ^ハ句^く
浄^{じやう}守^{しゆ}方^{はう}丈^{ぢやう}も^も信^{しん}了^{りやう}人^{にん}有^あー^ああ^あま^まり
さ^さへ^へ中^{ちゆう}あ^あつ^つま^まの^の半^{はん}婦^ふも^もま^まで^でか^かま^ま
名^な経^{けい}より^{より}美^み方^{はう}丈^{ぢやう}ハ^ハ今^{いま}ま^まに^に登^{のぼ}り^りと
と^とども^{ども}是^{これ}も^も好^{すき}不^あ好^まあり^りを^をほ^ほを
さ^さう^うひ^ひり^りく^くを^を盤^{ばん}津^{しん}の^の津^{しん}と^と浦^{うら}ま^まで

富^{とみ}女^めの^の末^{すえ}度^{ひら}ー^せの^の中^{ちゆう}は^は二^に流^{りゆう}の^のを
う^うぬ^ぬお^おり^りく^く上^{かみ}ハ^ハ玉^{たま}の^の簾^{せん}の^のう^うら^らり^り下^{しも}ハ
藤^{ふじ}沼^{ぬま}の^の芝^{しば}居^いよ^よの^のつ^つる^るま^まで^でか^かつ^つる^るま^まと
り^りる^るま^まな^なー^彼方^{かた}の^の横^{よこ}町^{まち}は^は方^{かた}の^の物^{もの}
及^{およ}び^び盤^{ばん}津^{しん}富^{とみ}女^めの^の表^{おもて}札^{しるし}る^るま^まに^にあ^あり^り
店^{てん}子^この^の娘^{むすめ}の^のき^き洋^{やう}子^こハ^ハ大^{おほ}衆^{しゆう}の^の親^{おや}丈^{ぢやう}が
看^{けん}經^{きやう}と^とさ^さぬ^ぬく^くけ^けの^の物^{もの}停^と止^ぢの^の俗^{ぞく}字^じ
小^{せう}の^の海^{うみ}岩^{いわ}の^の丸^{まる}と^とり^りま^まで^でか^かつ^つる^るま^まと^とり^りは

梅考は仔細の行のれりよふもい者声と
うりせられはまご名よあるゆも
男へへる小襟くともれ放し急く
までがい降極璃の帯わつてぞし
又極樂降ち小降溜璃世界より
又極樂降ち小降溜璃世界より
又極樂降ち小降溜璃世界より
又極樂降ち小降溜璃世界より
又極樂降ち小降溜璃世界より
又極樂降ち小降溜璃世界より
又極樂降ち小降溜璃世界より
又極樂降ち小降溜璃世界より
又極樂降ち小降溜璃世界より
又極樂降ち小降溜璃世界より

わりて迦陵頻伽の藝者でやい日
夜降るをとてあち井島子
おさん或ハ年季おさりのごご
きでいせあて金箔とごさ
り不詳といさよ織のおて格の
ちるきれ一なり初て降る世
子流きて今ち中お考仔細の
の出来たるなり是のや

ぐ 余 風 一 人 和 考 の 器 也
推 歎 牧 笛 楽 有 づ ぎ る 事 有 一 固
孝 子 節 義 文章 小 色 欲 多 く 善 美
嬖 礼 有 り 有 れ ども 其 事 有 り 知 事 有
ア せ まん ぎ づ 姑 の 小 云 有 士 の 悪 云
と 夢 見 へ ま じ かり 試 子 一 ツ 二 ツ 也
い へ ん 高 尾 懺 悔 と 云 へ り 有 ち の
字 の 名 を つ いて と 云 へ 又 白 あり

曲 礼 子 女 子 許 嫁 一 也 并 而 字 也
強 子 有 づ き 有 り 又 考 考 の 澤 有 ち 有
唯 有 り 有 り 有 り 有 り 有 り 有 り 有 り
又 考 考 詩 曰 奏 假 無 言 と 云 へ 有
い 難 一 有 又 考 考 有 小 思 格 子
を 有 り 有 り 有 り 有 り 有 り 有 り
津 形 考 考 有 有 有 有 有 有 有 有
津 形 考 考 有 有 有 有 有 有 有 有

くら火とぶし比らへあつ二人の者
 づきとも年季ののこるて一人ハ
 深漂のうハちりやしてさうし
 子ねぐみと肩よりけ一人ハ侍焼
 の布子子株結のあぐれをしめ
 是も角のりこうを深さる子ね
 くみとうこまうけつぎきも湯ぐく
 里とるて門口よして伊サア源介源介

くらりー源介 マアさきぬくらりて
伊 ナノかまうことハねんさきんへら
 つしな源 ころやアをドラウそごうじ
 さきぬさきんへらりー伊 そんな
 ら結りー小使をウヤウト
修次のワきく小づんまろモシをけ人小使
とるりのあがりやのぬら
 ろりません伊 ホイころりやアはめん
 せへ大ワおらひト又むうのどへその
これてあまひまふれとあけ

まくさ（杖六）ゆびのさきでさうらうをり **（源）**おのう
のさきをさうらうにたがら

かぞえるが座（ざ）しきでもりてさてう

（梅）けいこをわ（い）と垢のうらうら

のさやせ **（源）**何とあそぶやう **（信）**を

をなさるめんじやふ（ト）りうらべつ乃

くとうら（舞）る源（だ）ゆ伊（い）八（は）もぶらうり（り）てそ

くまう（つ）る梅（め）のりう（く）わいさう（り）ふあ（ん） **（伊）**るんとさきいふめん（と）らう上（上）子（子）

（源）三丁目本ぐさり （仲）る （梅）うらめらやアア

い代物（しろ）のわく（い）ささぬるんぎアウヤ

かわさう（い）う（う）よく（き）る（こ）ぶ（り）

るせ（く） **（源）**又あまのむんりりあよ

ふのゆんでらんねく肉がゆう（い）

まうねく（け）アアア **（伊）**そらち

の（あ）ま（ん）ち（う）も（ち）ら（ま）し（い）ナアおやう

さ（い）そ（ま）も（ね）ナ（ト）り（ま）り（ま）り（ま）

つ（き）い（い）さ（わ）れ（ん）も（れ）も（れ） （ん）ト（や）ア（ア）

さ（い）て（い）ち（ち）つ（て）飛（り）れ（ず） （ん）ト（や）ア（ア）

もゆくといふか不と夜がこもどくもいぞ
らが物つらの才こトやうくつてらぬそ
く母もちりとなるりかまのつて
もよるらう母店とみでも又またあさうやど
かづりさどやそれトやさうい
ららうもていついささうつけま
るうんとや母半はんさんそまじでもお
めあぢ比ひ目めの石いし場ばの考こう念ねん又また志しこん

三十一

るなるそしどねトまきし中ちゆう忍にん入いらうそうれ
わあうらしらいがマアそんなるゆい
てどやせらめんトやいの母らよあ
そのだんまや母あひゆい
る不ふどつらひひゆいあいのんトや
コリヤあのからうららうらまなま
ら母がくのせんうまマットあるトやく
あ母くあははままああららけけららぬぬああででるるんんトトややらら

いふさびらんとやうに等し
てやいささものを社考古きるでもみりれ
ど皆いささものと一ツてんたりのさち
よぶつらとえゆるあり又博奕の筈
と女藝者おいららびやうで一夜檢校
の幸多し七ららびハをささくらん
志のうくのりなるべしあれども
蘇云でちやると形でちやると二い

らあり是れを孔者のみで
と娘の主人のごらくさうづり
それわればかりと慈子こころ
我まゝ不孝の象牙の櫛と
小のさるべし親の長下のごらく
我子よりやまひうーづきこ味
縁若をうりざ約下結とる
る皆欲の皮より出て三法の皮

うりもわりの一又またられらぐせり
とらぬらふらるや志願のの
の〜ハ漢士ゆきしの妓きとのり
莫愁もくしゅう陽阿やうあ翠翹すいせうあがりの名妓なき
舞ま一和わ玉たまよてん白拍子ましろびやくしとらるる
鴻こう子し翠すい。和歌わがあるとせくせき〜子こ名な
のりのりのかぎんかぎん〜
女にょ舞ま老らうけ流りゅうとと溜りゅうッッ〜上方じやうほう

あてハ舞ま子し舞ま子しといひいハハアアママ
もあまハあま踊おど子こといひい〜
た〜ゆめハ名な高たか記き。未みつ。照てう。照てう。か
とありあり〜浮う。年ねん天てん豊ほう。地ちの幸さち。か
どとたゆめささ〜。新しん宴えん。ま。百ひゃく合がっ林りん
〜とらら〜
愁しゅうを忘わすれれ〜
とも今いまハとらら〜

あふそあふそあふそ

豊後畢

申

酒氣貧通

町傾城辛苦情年

通子 町馬 漆 傾城 會目

傾曰主不遠千里而來亦將

有以見艷書乎 床花反明同人 他女郎之

通子 妾曰君何必曰茶終爲

賢虛而已矣 茶言虚也

河の中 小持のきり 立 甲

申まをり扱まてハ申まをり。柳やなぎのうげうらやうくと
よび。花はな道みちうらや上まうまんとりつふも
まふそれくの才えいの業わざるり。人ひとる方かた
りさぬくま。世よにうす中なかよもた
めすくあまの流ながれの才えいの。うそのしずの
岩いわかりとりつどもそのうらあも室むろあ
まてはまごの徳とくあられぬのたぐく物もの
とられさやど捨すてさまきののり。交まふ

去きぬるら大おほ岩いわ屋やとりつよ花はな衣えとり
婿むこ帰かへわり彼かれが客きやくよ富士井田ふじいでん藝ぎ吉きちと
乾か治ぢのりまがひよられつはとらまら
かのまろれぬと捨すてめささうとくして
終はつの心こころ中なかと極ごくり二人ふたりが中なかハ深ふかなれど
も海うみ州しゅうの中なか吸す畝あしへあひ来きり氷こおりの又またぬ
まをるすすお袖そでのかみをやぶんと
ぞよお刀やいばの心こころの内うちを刺さしとる

ものあり。を川とさうくありと
えれど、^ま睦よ^ま立^まをの^ま入^ま石の^ま地^まを^まさ
と。業^ま山^ま子^まの外^ま。人^まら^まし^まさ^まの^まの^ま形^ま
ね^まへ^まり^まく^まが^ま心^まの^まお^まれ^まう^まと。又^ま刀^まら
る^ま、^ま成^ませ^まば。は^ま無^ま利^まと^ま夢^まう^まけ^まー^まの^ま。こ
ら^ま不^ま石^まの^ま地^まを^まさ^まう^まさ^まぬ^まり^まき^まく^まへ^ま心^ま中^まに
て^まち^まぬ^まる^まの^まの^ま。と^まち^ま世^まを^まも^ま小^ま浪^まで^まか
の^ま。は^ま世^ま利^まと^ま夢^まを^まお^まう^まけ^まか^まを^まれ^まー^ま

たふゆくとふしんうそが地^ちを^をさ^さる^るは^は先^先と
し^して^てこ^こし^しひ^ひと^とま^まひ^ひ鳴^鳴や^やが^がど^どや
そ^そら^らと^とち^ちが^がの^のち^ちの^の今^今が^が九^九眼^眼目^目と^とや
る^るひ^ひお^おれ^れう^う。と^とめ^めこ^この^の糸^糸で^でも^もた^たひ^ひ。さ^さと
め^めて^て先^先の^の世^世を^をの^のと^とぐ^ぐで^でも^もあ^あら^らう^うが^が。ち^ちと
張^張し^しと^とひ^ひる^るが^があ^あら^らう^う。死^死出^出の^のま^まを^をび^びら
の^のま^まを^をの^のこ^こね^ねふ^ふ受^受て^てと^とま^まき^きや^やま^まし^し。う^うる^る
ず^ず又^又縫^縫の^の変^変化^化と^とや^やと^とち^ちを^をま^まを^を中^中

死いのいかえにらりるをあれてあれど今好す
この世よの中にに。又えのいんまいしをせみ
一生い生まれてその女をうやます。骨こ骨こ虚きして死す
ぬもおしそうりとさきに一つ。又ま金がいん
と不ししに進んだときいふやしと死
我わの食傷をして命をとうかすたと
是これらの金を中に下すとも得らべし
おるがくの女の道とて果るるをも須か

世せ界かいの人皆ひその穴け門もんより生まれて又
その死は是花はなの根より生ずるの道理り
トやめのと。定ち規ぎ授じ子しといふ不可く
あり。二つの死命を一つの女の死命とす。心しん中ちゆう
死しを自悔まらしむ。骸こ骨こを骨經けいふらしむ
て。志しをうらり法はをうらしむ。子こをく死しをと
あらわし。續つりの外みより生ずるの道理り
今いま時ときの心中ちゆうの義もあらべ情じやうでもわからく

唯不自由友のむり死乙。又うゝさるる
むさき始り。づんこ殿一彩門づーを
吹き。志づるのをふる度よ。半七と務
が死ぶるむしや。おそめ久松が心中
の危理しや。あま不とまでふさるの
情をつくく。さう命も持そふかこの
口まらうとそも持ふひせぬと素癪る
心より心中死をうら申しうれど

志をあらむまらむ中へのむす板とや
ゆくの原をうむるがうむかかれバ
あつめの川。ぢりそぢりふあうく。野の
義後。はまのあうづり。どうもひん様ど
と。是がむんまのひらう。一ッ町ぢ
とおひまのあつたれとる。又うら
ふの志中うらりとつるもの有りて拍
子よく。今死ぬる者でぢぢりかぢら

けくゆいいうあもあゆらさうあふんや
あり。ねむをつらぬひのぶがらしくも
かゆくも何ともかくうづひ寝子毛ゆげん襦せんをうけ
らうとまぐさぬ三階かいを休やすみ息いき一いち。鳴な子こ
今の心こころ中のまきりひひものであり。ようん
あひ死しごと。切落きりおち一いちであやくのころを
夢ゆめていつかど。おの心こころ中ちゆうががああららししの
かからら。ああぐぐささみみおお死しででああららぬぬめめののここららも

あー中ちゆうくくそんそんふふ再あま々まなるなるゆゆよよああ一いちど
ああんんままううふふ死しるるちちままららししくくぬぬめめののかからら
べべーーららんんののむむららんんづづららでで死しぬぬららん
ああららししゆゆううららののちちままららししくくああららぬぬめめのの
どの道ちゆう子こののままららししくく。三さん世せああんんづづららののまま
ををままららしし。ふふ忠ちゆうふふ孝かうののつつららのの世よふふららまま
ぬぬららししんとと。自じ若じやく後ごとと回わいけけししぐぐ。ああぬぬ人にん
是これもも夢ゆめ。是こゝ地ぢ養やうのの。そそららののここららししるるままん

じよのちよんまのしよぬかたれた牙の。むらじよ
 のららつらつら。襟落のちよぬ心とこ
 がー紐の枝ふ身をつるぐれ。後程の陌
 は争闘して。まぢの人女房かどもとよび
 ろりませんかなく。うらう志りあり
 ろちよぬぬもよらうむ。又窓の
 一急よあり。よの首尾めく降古つ
 けするありとも。夏生男か子とつらて

のいと男と女。さらさら男とたなれ
 極ふくけらうらうら。まらぬる女が男
 小娘さかうらな物で育らみぞやと。けら
 を付の二人のおどろき。おれぐらぐら
 女が男かたりまらうとともぢくこの
 とおし。まらや来世でも添はまぬ。志ら
 い死でも着かたらうと。うら志るれば地
 死する。そのさみあみをせよあり男か子

て生いてがゆい。おおよよ思し案あんををああくくくくええや
 とと袖そでんんごごろろののここままんん。おお人ひとののああららくくと
 るる心こころはは小こ袖そでののちちりりををああららくくひひ。積つみををあ
 しくしく力ちからとと命いのちををああららくくととささややおおささめめ。ままごご
 くくららああららくく立たちちくく。地ぢ花はなををああららくくたたががあ
 わわららいいててああららくくのの心こころががああららくくももああららくくああららくく
 天命てんめいとと獨ひとりりりととああららくくのの違ちがひひををああららくくああららくく
 二人ふたりががああららくく地ぢ花はなををああららくく。利り益えきののああららくくああららくくああららくく

とうい
 申まう畢へい

京傳予誌大尾

東叡山 御書物所 江戸下谷御成道 青雲堂英文藏製

東叡山御書物所	出重寺文次郎	大板屋次郎
大板屋次郎	河内屋次郎	大板屋次郎
河内屋次郎	山本屋次郎	和泉屋次郎
山本屋次郎	遠泉屋次郎	岩松屋次郎
遠泉屋次郎	大浦屋次郎	小井屋次郎
大浦屋次郎	中津屋次郎	佐屋次郎
中津屋次郎	山本屋次郎	扇屋次郎
山本屋次郎	玉屋次郎	紅屋次郎
玉屋次郎	角屋次郎	恒職屋次郎
角屋次郎	伊勢屋次郎	鶴屋次郎
伊勢屋次郎	栗本屋次郎	津本屋次郎
栗本屋次郎	日守屋次郎	美大
日守屋次郎	新井屋次郎	然

Handwritten notes on the left page, including the number '100' and other illegible characters.

